

# 結核

第五卷 第四號

昭和二年四月二十四日發行

原 著

## 結核ト誤マラレタル放線狀菌病ノ一例

東京市療養所 柴田正名  
石川友示

余等ハ大正十四年中肺結核ノ診斷ノ下ニ東京市療養所ニ收容セラレタル患者ニシテ發病後約半歲ヲ經テ初メテ放線狀菌病ト判明シタル一例ニ接シタルガ故ニ此處ニ其臨牀竝細菌學的所見ノ大要ヲ記シ、肺結核ト誤マラレタル放線狀菌病例ノ追加トシテ報告ス。

患者。 某 男子 年齡十四歲、職業莫大小職工。

家族史。 特記スベキモノナシ、患者ノ父ハ井戸掘ヲ業トス。

既往史。 幼時「チフテリ」ニ罹リシ事アリ。 二年前脚氣ヲ病ム、ソノ他著患ナシ。 本症ノ感染機轉ニ關シテハ何等捕捉スベキ事項ナシ。

發病。 大正十四年七月ヨリ特別ノ原因ナク右側前胸部ニ疼痛ヲ訴ヘ輕キ咳嗽喀痰及呼吸促迫心悸亢進アリ、八月ニ入りテ醫診ヲ受ケ肺結核ト診斷セラレ以來自宅ニテ病臥靜養ス。 當時熱感ナク檢溫ハ行ハザリシト。 ソノ後胸痛ハ背部ニ移

リ咳嗽時ニハ増強セリ、呼吸困難心悸亢進ハ漸次増悪シ尙時々盜汗ヲ訴ヘタリ。同年十月二十一日肺結核ノ診斷ノ下ニ東京市療養所ニ入所ス。

入院時ノ所見。身長及骨格普通、榮養不良羸瘦高度、貧血著明。體溫朝三十七度夕三十八度九分ニ及ブ弛張熱型ヲ呈ス、脈搏一〇〇至性正常、呼吸三十三。自覺症トシテハ輕キ咳嗽喀痰盜汗心悸亢進睡眠不足右側背部及ビ頸部ノ疼痛アリ。頭部顔面異常ナシ、右側頸淋巴腺數個小指頭大乃至栗實大ニ腫脹シソノ大ナルモノハ柔軟ニシテ波動ヲ呈シ互ニ癒合シテ腺塊ヲ形成ス、指壓ニヨリテ痛ミヲ訴フルノ外時々自發的疼痛アリ患者ハ常ニ首ヲ前右方ニ傾斜セリ。

右背ノ上部ニ手掌大ノ圓形ヲナセル扁平ナル隆起アリ、ソノ境界ハ凡ソ上ハ第二胸椎ヨリ下ハ第五胸椎ノ高サニ及ビ右ハ右肩胛骨ノ内緣ニシテ左ハ脊椎ヲ越ユルコト約一橫指ナリ、下層組織トハ密著シ移動セズ、皮膚ノ癒著及ビ發赤等ハ未ダ之レヲ認メズ。硬度ハ上半部ハ硬ク彈性ヲ帶ビ下半部ハ稍々柔軟ニシテ微カニ波動ヲ呈セリ、指壓ニヨリ深部ノ疼痛ヲ訴フ。頸椎及ビ胸椎ニハ畸形ヲ認メズ尙棘狀突起ヲ敲打スルモ疼痛ナシ。コノ背部ノ腫物ノ何時頃ヨリ生ジタルモノナルカハ患者ノ口述不確實ニシテ之レヲ詳ニスルコト能ハザリキ。

肺臟所見ハ右肺尖ヨリ第三肋骨マデハ濁音ヲ呈シ聽診上呼氣鋭ク且延長セリ、左肺ニ於テハ上葉ノ上部ハ前面背面共ニ打診音短縮シ該部ハ呼吸音殆ド缺如ス、兩肺全般ニ互リ呼吸音微弱ニシテ水泡音竝ニ摩擦音ハ何處ニモ聽取セズ。心音稍々微弱ナレドモ雜音ナシ。腹部ハ臍下部ニ指壓ニヨリ鈍痛アル外著變ナシ、脾肝ハ觸知セズ。全身ニ知覺障礙ナシ、膝蓋腱反射稍々亢進セリ、喀痰ハ膿様粘液性ニシテ結核菌及ビ彈力纖維ヲ認メズ。尿蛋白及ビ糖ヲ檢出セズ、糞便中多數ノ蛔蟲卵ヲ認ム。

血清ノ鴻上氏結核補體結合反應及結核凝集反應ハ共ニ強陽性ナリ。

「レントゲン」線透視ニヨリ兩肺上葉殊ニ右肺ニ著明ナル陰影ヲ認ム。

以上ノ臨牀所見ニヨリ肺結核ヲ主トシ之レニ淋巴腺結核、肋骨「カリエス」ノ疑ヒ竝ニ蛔蟲病ヲ合併セルモノト診斷シタリ。

經過。背部ノ腫瘍ハ日ト共ニ徐々トシテ隆起ノ度ト廣サトヲ増加シ之レト共ニ局部ヲ始メ頸部右肩胛部ノ疼痛劇甚トナレリ、十二月中旬ニ及ビ腫瘍ノ殆ド全體ニ著明ナル波動ヲ認ムルニ至リシヲ以テ同十九日太キ套管針ヲ用ヒテ試驗穿刺ヲ行ヒタルニ膿ノ流出ヲ見ズ、波動ノ顯著ナル點ヲ選ミテ反復穿刺シ充分吸引シタルモ僅ニ微量ノ血液様膿汁ヲ得ルニ過ギザリキ。數日ノ後コノ穿刺孔ヲ中心トシテ皮膚ノ發赤現ハレ二週日ノ後遂ニ自然ニ穿孔シテ帶黃色ノ極メテ粘稠ナル膿ヲ排出セリ、然シテコノ膿中ニ多數ノ「ドルーゼ」ノ存在セルヲ認メ次デ之レヨリ後述セル如ク放線狀菌ヲ分離培養スルヲ得タリ、尙且之レト殆ド同時ニ頸部淋巴腺モ亦穿孔シソノ膿中ニモ同様ナル放線狀菌「ドルーゼ」ヲ認メタリ。茲ニ於テ放線狀菌病ノ診斷確定セリ。

其後右側頸部及ビ背部ニハ數個ノ潰瘍ヲ生ジ「ドルーゼ」ヲ含有セル膿ノ排出持續セリ、頸部ノ潰瘍ハ大體橢圓形ヲナシ小豆大乃至一錢銅貨大ニシテ邊緣ハ潛下シ或ハ皮下ニ於テ互ニ相交通セルアリ底面ハ淺クシテ比較的平滑ナリ、背部ノモノハ不規則ノ形ヲナシソレヨリ瘻孔ヲナシテ深部ニ達シ多量ノ膿ヲ排出ス。當時ノ喀痰ハ少量ニシテ其中ニ「ドルーゼ」或ハ放線狀菌絲ヲ檢出セズ結核菌モ亦陰性ナリキ。

患者ハ大正十五年一月以降ハ右頸肩胛部ノ痛ミニ加フルニ新ニ左胸深部ヨリ左上膊ニ放射スル疼痛ヲ訴へ上體及ビ首ノ運動ハ痛ミヲ伴フガ爲ニ著シク制限セラル、ニ至リ、食思不振、心悸亢進、咳嗽下痢腹痛等ノ症狀増惡シ衰弱日々ニ加ハル、二月ニ入り體溫三十九度ヲ越エ脈搏一三〇呼吸三五ヲ數フ、一日三乃至五行ニ及ブ頑固ナル下痢ヲ伴ヒ一般狀態頓ニ險惡トナリ遂ニ三月六日死亡セリ。死後遺族ノ不承諾ニヨリ剖見スル能ハザリシハ深ク遺憾トス。

「レントゲン」像所見。入院當時レ線透視ニヨリ兩肺上葉ニ陰影ヲ認メテ卒然之レヲ肺結核ト思惟シタルガ後大正十五年一月二十一日(放線狀菌檢出後)ニ撮影セル「レントゲン」寫真ノ影像ハ一見肺結核ト見ラルベキ點モアレドモ之レヲ精査スレバ多少之ト相違セル諸點ヲ發見シ得ルガ如シ、今ソノ概要ヲ記サンニ右肺ニ於テハ肺炎以下第二肋骨ニ及ビ更ニ右肺門部一帶ニ續ク大ナル陰影アリソノ限界ハ明瞭ナラズ、ソノ他ノ右肺全面ニハ大理石斑紋様ノ陰影瀰漫シ下葉ニ於テハ相癒合シテ指頭大圓形ノ陰影數個ヲ形成セリ、左肺ニモ亦肺炎ヨリ第二肋間腔ニ互レル陰影アリ下方健常部トノ境界

ハ側方ニアリテハ明瞭ニシテ殆ド水平ノ直線ヲナシ乳房線ヨリ副胸骨線ニ至ル間ハ不規則ナル曲線ヲナシ且ツ明瞭ナラズ、左肺門部ノ陰影ハ稍々擴大セルノ感アリ。兩肺上葉ノ陰影ハ強度ナラザレドモ全體極メテ均等ナル濃度ヲ有スルヲ特徴トシ且ツ上部ヲ完全ニ充塞セルコト及ビ健常部トノ境界ノ模様等ニ於テ肺結核ノ各種病型ニ於ケル陰影ト多少其趣ヲ異ニシ寧ロ肺腫瘍ノ像ニ近キヲ思ハシムモノアリ然シテ右肺下部ニ於ケル陰影ハ最モ肺結核ノモノニ類似セルガ如キモ個々ノ濃度ハ殆ド皆一樣ニシテ一般ニ稠密ナラズ。寫真全體ヲ一見シテ受クル感ジハ陰影強度ナラズシテ濃淡ノ差少ク平等ナル事ナリ。

細菌學の所見。本患者膿汁中ノ「ドルーゼ」ノ多クハ罌粟粒大ニシテ帶黃灰白色、中央ハ菌絲塊ヨリ成リ、周圍ハ美麗ナル棍棒狀體ノ配列ヲ認ム、コレヲ載物硝子上ニ破碎塗抹シグラム染色ヲ行ヒ鏡檢スルニ、無數ノグラム陽性ノ不定ノ長サヲ有スル放線狀菌ヲ認ム是等ノ「ドルーゼ」ヲ集メ生理的食鹽水ヲ以テ洗滌シ、「ゲンチアナ」紫ヲ加ヘザルペトロフ氏培地ニ塗抹シ、プフテル氏嫌氣培養法ヲ行フニ、十本中一本ニ於テ多數ノ放線狀菌集落ヲ得タリ、又「Pillsbury」五%葡萄糖寒天平板ニ劃線培養ヲ行ヒ、レンツ氏嫌氣培養法ヲ施スニ三枚中二枚ノ平板ニ約三十個、一枚ニ於テハ一個ノ放線狀菌集落ヲ得、尙其他ニ少數ノグラム陽性帶褐黃色ノ葡萄狀球菌ノ集落ヲ得タリ、而シテ本放線狀菌ハ前記葡萄糖寒天高層振盪培養或ハ煮沸脫氣ノ葡萄糖「ブイヨン」ノ深部ヲ以テ、容易ニ累代移植スルコトヲ得タリ。本菌株ハ「デフテリ」菌樣形態ヲ有シ長サ約一「ミクロン」ヨリ十一「ミクロン」或ハツレ以上ニ及ブモノアリ多クハ三乃至五「ミクロン」ニシテ大サモ一定セズ、菌絲斷裂ヲ認メ少數ノ分枝ヲ證明ス、菌ノ一端又ハ兩端ニ膨大ヲ認ムルモノアリ、グラム陽性ニシテ、酸及「アルコホル」ニ對スル抗性ヲ有セズ、前記培地ヲ以テ攝氏三十七度ニ於テ、約一週間前後ニ於テ著明ニ發育ヲ認ム、集落ノ大サハ移植ノ菌塊ノ大サニヨリ一定セズ、硬度又多少柔軟トナレリ、灰白色軟骨樣色澤ヲ有シ、大ナルモノハ球狀ヲ爲サズ凹凸ニ富ム塊狀ヲナス、本菌純培養ノ多量ヲ海狸腹腔内ニ注入スル時ハ臟器ノ癒著又ハ「アプセス」ヲ形成スルモ著明ナル病原性ヲ認ムル能ハズ。是等ノ性狀ハ佐々石川ノ報告セル肺放線狀菌病患者ヨリ分離セル放線狀菌「宮木」株ト同様ニシテ、本菌株モ亦ウォルフ、イスラエル氏型病原性嫌氣性放線狀菌ニ屬ス。本菌株ニ於テモ培養菌ハ

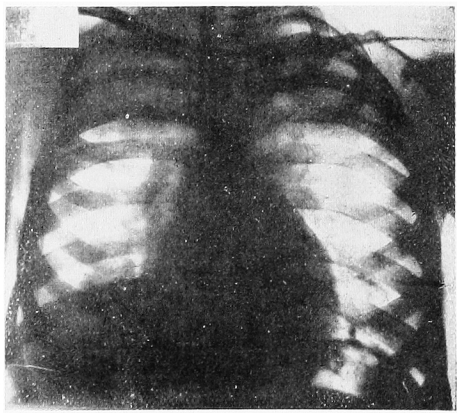
(I)



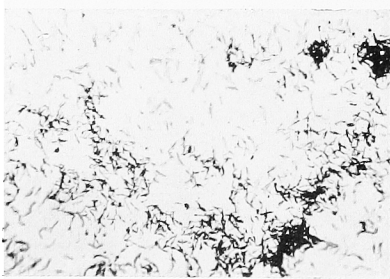
(II)



(III)



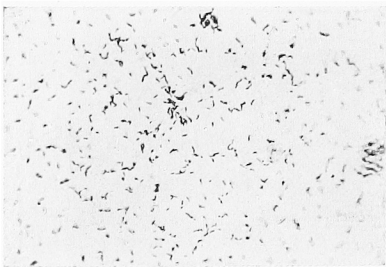
(IV)



(I) 患者  
(II) レントゲン寫眞  
(III) 純培養グラム染色  
(IV) 分離第一代平板  
培養

(V) 同、短少ニナリタ  
ルモノ

(V)



(第五代高層培養)

一般ニ短小ニシテ「宮木」株ニ比シ甚ダ *Limpp* ナリ。分離後二代ニ於テハ特ニ菌形甚ダ短ナルヲ認メタリ。

## 總括

余等ノ放線狀菌病例ハ最初右側前胸部ノ疼痛ヲ以テ初マリ咳嗽喀痰心悸亢進盜汗等ノ症候アリ肺結核ト診斷セラレ發病後四ヶ月ヲ經タル入院時ニ於テモソノ自覺症狀臨牀的肺臟所見「レントゲン」像竝ニ血清反應ハ殆ド全ク肺結核ニ一致シ、唯喀痰中ノ結核菌ハ陰性ナリキ、當時背部ニ手掌大ノ隆起アリ又右側頸部ニ淋巴腺ノ腫脹ヲ認メタレドモ是等モ亦結核性ノモノト診シタルニ後背部ノ腫瘍及ビ頸淋巴腺ノ穿孔ニヨリテ排出セル膿中ニ放線狀菌「ドルーゼ」ヲ發見スルニ及ビ初メテ診斷確定スルニ至レルモノナリ。

肺臟ト頸淋巴腺トノ病變發現時期ノ前後ニ關シテハ全ク不明ナレドモ肺臟ニ於テハ臨牀症狀竝ニ「レントゲン」像ヨリ推スニ最初ニ右肺次デ左肺ヲ侵セルモノニシテ兩肺共ニソノ病變ハ肺尖部ニ始マリテ下行シ右肺ニテハ全體ニ蔓延スルト共ニ胸腔壁ヲ貫穿シテ背部ニ腫瘍ヲ形成セルモノナルベシ。

喀痰中ノ「ドルーゼ」及ビ放線狀菌ハソノ方面ノ檢索多少充分ナラザリシモ之レヲ證明セザリキ。

本患者ニ於ケル肺結核ノ合併ノ有無ニ就テハ、臨牀經過、「レントゲン」像、喀痰中終始結核菌ヲ證明セザリシ點等ヨリ結核ヲ殆ド除外シテ可ナリト信ズ。血清反應ハ結核陽性ヲ示シタルモ放線狀菌病ニ於テモ結核血清反應ノ屢々陽性ヲ呈スルコトアルハ周知ノ事實ナリ。尙末期ニ現ハレタル腸障碍モ或ハ放線狀菌ニ因スルモノナルヤモ知レズ。但シ合併症竝ニ肺以外他臟器ノ病變ニ關シテハ剖見ヲ缺ゲルヲ以テ勿論確言ヲ許サレザルモノアリ

本患者膿汁中ノ「ドルーゼ」ヨリ葡萄糖寒天平板、及「ゲンチアナ」紫ヲ加ヘザルペトロフ氏培地ヲ以テレントツ氏又ハフブチル氏嫌氣培養法ニヨリ放線狀菌ヲ分離培養シ葡萄糖寒天又ハ葡萄糖「ブイヨン」ヲ以テ嫌氣性ニ累代移植スルコトヲ得タリ。本菌株ハウォルフ、イスラエル氏型病原性嫌氣性放線狀菌ニ屬ス、但シ本菌株ハ分離後其ノ菌形甚ダ短トナリタリ、本菌株純培養ノ多量ヲ海狸腹腔内ニ注入スルモ著明ナル病原性ヲ認ムルコト能ハザリキ。

終リニ田澤所長遠藤副所長ノ御校閲ヲ感謝ス。(文獻佐々、石川 結核第五卷第三號)